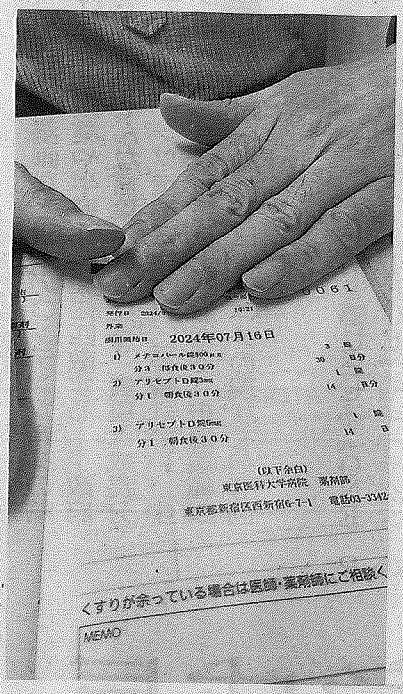
医療ルネサンス　No.8359　アルツハイマー病新薬　2/6

対象外 丁寧な説明必要

アルツハイマー病の新薬・レカネマブは使用できる患者の条件が厳密に決められ、希望をしても治療が受けられないケースも多い。薬が使えない患者やその家族に対し、医療者の丁寧な説明や支援も求められる。

東京都の男性会社員(60)は今年初め、東京医大病院で、主治医の高齢診療科主任教授の清水聡一郎さんから「レカネマブ治療は受けられない」と告げられた。

男性は2020年頃から仕事中に口がうまく回らなかったり、言葉が思うように出てこなかったりすることが気になっていた。顧客に書類を読み上げる時も、頭の中で言葉をしっかりと組み立てられず、途中で止まる。21年3月に同病院で検査を受け、アルツハイマー病による軽度認知障害（MCI）と診断された。記憶は保たれているが、病気の原因となるアミロイドβ（Aβ）が脳の言語に関わる部位にたまり、言葉の問題が出ているという。



今年夏からアリセプトの治療を始めた男性。「失ったものにとらわれず、これまでの経験を生かしたい」と話す（東京都新宿区で）

レカネマブに公的医療保険が認められたことを昨年末の報道で知り期待していた男性に、清水さんは使用できない理由を説明した。

レカネマブを使うには①MMSEと呼ばれる認知機能検査で30点満点中22点以上②脳出血を発病したことがない③脳のMRI（磁気共鳴画像）検査で微小出血が4個以下――などの条件がある。MMSEは日付や場所を答えたり、簡単な計算や文書を反復したりして短期間の記憶を確認する。男性は記憶力はあるが、回答を言葉でまとめられず22点に満たなかった。

清水さんは「レカネマブは新しい武器だが、一つのツールにすぎない。ないと闘えないわけじゃない」と語りかけ、男性は「悔しさはあるが、仕方がない。できることを考えたい」と気を取り直した。妻(59)も「ショックだったが、夫にはもっと合う方法があるのだと思うようになった」と言う。

男性はその後病状が進み、7月から症状を和らげる既存の認知症薬「アリセプト」を使う。仕事に支障を来さないよう、やり取りは電話からメールに切り替えた。症状の進行が抑えられる効果を期待し、ドリルや運動にも積極的に取り組む。

同病院ではレカネマブ投与を希望した人の3分の2は使用対象から外れた。清水さんは患者家族から「使えると思って検査を受けたのに！」と怒りをぶつけられた経験もあるという。

清水さんは、医師らが「今なら間に合うから検査しましょう」と過度な期待を抱かせた点を認めながらも、この薬がアルツハイマー病で低下した機能を元に戻すわけではないと強調する。その上で「レカネマブが使えなくても、落胆することは全くない。患者と家族が前を向き、日々を過ごせるよう支えたい」と話す。